

第37回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館



講演する溝口教授

附属図書館は、10月20日(火)、中央図書館2階ディスカバリスクエアにおいて、第37回友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。

今回は、溝口正人名古屋市立大学芸術工学研究科教授による「モノのふみをよむ - 絵図と遺構で読む高木家陣屋 -」と題した講演が行われ、学内外から36名の参加がありました。

講演では、まず、大垣市上石津地区にある国史跡旗本西高木家陣屋跡について、同図書館で所蔵している高木家文書の伝来により、近世における旗本領主の実態を明らかにすることが可能な遺跡であることが説明されました。そして、屋敷図や古写真、遺構の調査結果などを使いながら、陣屋の構造と歴史の変遷が解説されました。

参加者からは、「当時の屋敷図や建築から文化を知ることができた」、「建物と文書とあわせて説明があり、江戸時代をイメージしやすかった」などの感想が寄せられました。

第114回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する堀教授

減災連携研究センターでは10月22日(木)、減災館において、第114回防災アカデミーを開催しました。今回は、堀宗朗東京大学地震研究所教授が「スーパーコンピュータの地震防災・減災への利用」と題して講演を行い、66名の参加がありました。講演は地震工学という学問分野の紹介から始まり、建物や構造物を設計する際に行われる地震応答解析の重要性が示された上で、日本最速のスーパーコンピュータである「京」を用いて行われた、地震防災に関連するシミュレーションの様々な実例が紹介されました。高層ビルなどの建築物の詳細な構造まで含めて計算機中のモデルとして用意され、大地震時の振る舞いが正確に予測でき、さらには都市全体の挙動や津波来襲時の避難など、構造物の応答だけでなく、防災に関連する幅広い分野で活用されていることが分かりました。シミュレーション技術は、災害の経済活動への影響など、さらに幅広い分野へと拡張されており、今後の展開が期待されます。

第47回地球教室を開催

●博物館



南知多の海岸付近で化石採集を行う参加者の様子

博物館では、10月24日(土)、25日(日)の2日間、第47回となるフィールドセミナー地球教室「博物館の収蔵庫と野外で深海の地層と化石を調べよう！」を開催しました。今回は抽選で選ばれた28名(小学3年から高校2年生と一般)が参加しました。

1日目は同館において、日本や世界のさまざまな地層について紹介した後、地層を作る実験をしました。また、同館の収蔵庫において、同館所蔵の化石などを観察しながら、化石が地層の中に残されるプロセスについて考えました。2日目は南知多町の礫ヶ浦と片名を訪問し、砂岩と泥岩の地層を観察した後、化石の採集を行いました。参加者は、二枚貝やヒトデ、ウニ、魚の鱗などの化石を自分で見つける興奮を味わい、古代の生物が地層に残された過程を考えることによって自然を身近に感じ、理解を深めていました。この事業は同館と名古屋市科学館との連携事業の一環で、愛知大学名古屋一般教育研究室の援助を受けています。